

大谷さんの思い出

島村 勲

理化学研究所 原子物理特別研究ユニット

平成 28 年 2 月 14 日午後、気温 24℃、和光にて

当時、名古屋大学プラズマ研究所におられた大谷さんを世話役として、20 名ほどの研究者が進めていた核融合関連原子分子データの収集評価活動に、私は参加しておらず、彼の顔も名前も始め、存じませんでした。名大で開かれた(プラズマ関連?)原子衝突の研究会が、大谷さんにお会いする初めての機会でした。手元に記録がありませんが、たぶん、70 年代半ばごろだったでしょうか、私が宇宙研で研究者としてスタートしたのが 1970 年で、それからすでに何年か経っていたはずです。

以後、あちこちの学会、研究会で度々お目にかかり、お話しする機会を得ましたが、なにせあちらさんは飛ぶ鳥も落とす勢いの NICE ガイズの中でも最も風格を備えた顔役、エルガー顔負け威風堂々、肩で風を切って歩き、肩をすぼめたしがない電子衝突の理論屋とは雲泥の差。

その大谷さんたちと共に組織委員会メンバーとして準備した 1999 年の仙台 ICPEAC は思い出の一つです。その 20 年前の京都 ICPEAC では、高柳和夫組織委員長おひざ元の助手として、海外から直接自分に来る個人的な依頼・要求も含め、容赦なく降り注ぐ絶え間ない雑用の雨、嵐に耐えつつ、並行して電子・分子衝突のサテライト会議の準備にヒューヒュー言いながらも、何とか生き延びました。でも、前世の行いがよほど酷かったのか、何の因果か、仙台では雑用係元締め。

一方、大谷さんには、有馬朗人募金委員長の印籠ならぬ書状を手し、委員長代行としてあちで頭を下げ、こっちで頭を下げ、神経と何足もの靴とをすり減らし、並々ならぬ忍耐・努力により、会議の財政基盤を確立していただきました。彼自身のみならず、肝臓にも相応の負担を強いていたのではないかと想像されます。

なにしろ、一度に言わずに何回にも別けてあち

こち細かく難癖つけられ、書き直させられた申請書にも拘わらず、学術会議からの補助金は結局、ゼロ。さらに、ドル建て会議登録費を設定した時点からあつという間に為替レートが変動してドルの価値が下がり、実質的な登録料収入は激減。まさか、イタリアの連中のように、引き受けた ICPEAC、やっぱりできません、と返上するわけにもいかず、一時はどうなることかと思いましたが、大谷さんの大きな働きにより、募金のみならず、その後、文部省からの補助も下り、結果的には比較的楽な経理になりました。

仙台で、東京で、何度も何度も大谷さんたちと数名で組織委員会の会合を開きましたが、あるときは、契約していた国際会議運営会社の担当者や諸計画の詳細を詰めた帰り道、その会社の破産宣告を夕刊で知り、ああ、すべて振り出しに戻る！とガックリきたこともありましたが、でも、終わってみれば、参加者には結構喜んで帰ってもらえる会議になったようで、一同、胸をなでおろして、打ち上げの飲み会と相成りました。

大谷さんが病の床から快復されて出て来られたある会議で、頬がこけ、以前の彼の威厳がすっかり失われた姿に愕然としました。それでもその後、元気を取り戻され、2010 年春には原子衝突研究協会主催の若者向け原子衝突セミナーで長帳場の講義をされ、私もその最後の方をちよつと覗きに伺い、あ、もう大丈夫だな、と確信しました。その後も、折あるごとにお会いしましたが、場所が場所だけにものを食べるのに長い時間がかかり、一苦勞で、活力の源を十分に摂取することがなかなかできないんだと漏らしておられました。その後、病魔が踵を返して再び襲い掛かるとは、何とも運命の無慈悲なことか。

大谷さん、どうぞお安らかに眠りください。